

青森県三沢市（国内 35 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 4 年 12 月 15 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境・農場概況

- ① 発生農場は平坦地に位置し、周囲は田畑であり開けている。
- ② 当該農場の西側へ約 2.5km の距離に湖があり、調査時は降雪のため視界不良ではあったものの、数羽のカモ類が確認された。
- ③ 当該農場には、発生鶏舎を含むウインドウレス鶏舎が 30 舎、開放鶏舎が 16 舎あり、発生時には開放鶏舎 1 舎を除き採卵鶏が飼養されていた。このほか衛生管理区域内には廃舎 1 舎、集卵場 3 棟、GP センター 1 棟、衛生管理区域外に GP センター 2 棟等が併設されている。
- ④ 発生鶏舎は 2 階建てで、内部を縦に分割する壁により 2 鶏舎に区分されており、各鶏舎は背中合わせの直立 8 段ケージ（各階 4 段ずつ）が 2 列設置されている。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時 621 日齢）における 12 月 13 日までの過去 21 日間の 1 日当たり平均死亡羽数は 5.6 羽であり、当該鶏舎における鶏の成績は優秀で死亡羽数も少なく、産卵率の低下もなく、ほかに異状はなかったとのこと。
- ② 14 日朝に当該鶏舎で約 180 羽の死亡を確認したため家畜保健衛生所へ通報したとのこと。死亡羽数は 2 階で約 140 羽、1 階で約 40 羽であり、鶏舎奥側の中央通路を中心に、2 階は下から 4 段目、1 階は 2、3 段目で多く見られたとのこと。
- ③ 調査時、当該場所を中心に、数羽まとまって死亡している鶏や、衰弱鶏が確認された。なお、他の鶏舎では特段の異状は見られなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場で鶏舎内の飼養管理作業に従事する社員は 18 名とのこと。
- ② 担当鶏舎は 4 グループに分かれており、発生鶏舎を含むグループは 3 名で担当し、シフトによる日替わりで常時 2 名が作業しているとのこと。強制換羽の作業時のみ、支援のため他グループの担当者が鶏舎へ入ることがあるとのこと。
- ③ 各鶏舎からの死鳥回収、除糞作業はそれぞれ専用の従業員が従事しているとのこと。除糞作業は鶏舎によって担当は分かれておらず、日ごとにローテーションで回っているとのこと。
- ④ 衛生管理区域内に位置する集卵場 3 棟の従業員 11 名及び GP センター 1 棟の従業員 8 名はそれぞれの専任であり、鶏舎内には立ち入らないとのこと。なお、集卵場の従業員は集卵作業のほか、夏季のみ集卵場周辺的环境整備を行うとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 農場敷地の外周にフェンスが設置され、出入口には立入禁止表示が掲示されていた。衛生管理区域出入口には消毒ゲートが設置され、衛生管理区域内に入る外来車両は消毒ゲートと消毒槽にて車両消毒を行うとのこと。
- ② 飼養管理者によると、従業員が衛生管理区域に入る際は、自家用車を本社事務所の駐車場に止め、徒歩で消毒室へ向かい、踏み込み消毒槽で靴底消毒を行った上で衛生管理区域内へ入るとのこと。その後、休憩室又は事務所で衛生管理区域専用作業着・長靴を着用し、手指消毒を実施するとのこと。
- ③ 飼料業者、鶏の導入・出荷業者等の衛生管理区域に立ち入る外来業者は、鶏舎内外の作業を問わず、農場入口の更衣室で基本的に農場が用意した専用作業着及び長靴を着用し、手指消毒を行った上で作業を行うとのこと。鶏舎に入る際には、入口内

側の倉庫で保管している各業者専用の鶏舎専用長靴に更に履き替え、車両の内外消毒とフロアマット使用の上で鶏舎まで車両で移動すること。

- ④ 鶏舎に入る際は、各鶏舎前室入口に設置された踏み消毒槽（逆性石けん、3～4日に1回又は汚れたら都度交換）で靴底消毒を行って入室し、鶏舎内専用の長靴に履き替え、ゴム手袋を着用し手指消毒を行うとのこと。発生鶏舎では、前室の床がテープで鶏舎外用及び鶏舎内用長靴の区域に区切られていた。
- ⑤ 除糞作業者が鶏舎奥側で除糞機を稼働させるための作業を行う際は、鶏舎奥側の出入口から入退室を行い、石灰の入った踏み消毒槽を踏んで長靴の上からシューズカバーを装着し入室するが、長靴交換や手指消毒は実施していないとのこと。
- ⑥ 発生鶏舎では、鶏舎側面の2階上部にある入気パネルの隙間から給気され、鶏舎奥側の排気ファンから排気される自動換気を行っている。吸気口の外側には網目2cm程度の亀甲金網が張られていたが、調査時、鶏舎内で死亡が多く見られたあたりの奥側1か所に破損が見られた。排気ファンの内側に金網、外側には換気扇が停止すると自動で閉鎖するシャッターが設置されている。夏季は鶏舎入口側のクーリングパッドから吸気するトンネル換気を行っているが、気温が10℃を下回るようになってからクーリングパッドはパネルで塞がれていたとのこと。
- ⑦ 飼料タンクは鶏舎横に設置され、上部には蓋が設置されていた。発生鶏舎では、鶏舎内のラインを通じて自動給餌機により給餌を行っていた。農場内には飼料添加物置き場があり、飼料搬入業者が立ち寄り、バルクに添加物を投入した後、飼料タンクを回るとのこと。
- ⑧ 飼養鶏への給与水は井戸水を利用しており、塩素消毒を実施した上で鶏舎内のラインを通じて自動給水しているとのこと。
- ⑨ 発生鶏舎ではバーコンベアにより衛生管理区域内のGPセンターに直接集卵されるインライン方式となっている。鶏舎間のバーコンベア上部は屋根で覆われていたが、鶏舎開口部に遮蔽物等の設置はなかった。
- ⑩ 鶏舎内の鶏糞は除糞ベルトにより、鶏舎奥側のピットから排出し、鶏舎外でベルトコンベアにより専用トラックに積まれて堆肥舎へ運搬される。ピットの鶏舎内開口部は稼働時以外は木製の板で閉鎖し、鶏舎外の除糞ベルトは建物内に格納されているが、鶏舎内開口部近くのピットと床の接続部には10cm程度の隙間があった。
- ⑪ 死亡鶏は毎日朝の健康観察時に各鶏舎から集め、担当グループ内の1鶏舎脇にあるバケツに回収する。その後死亡鳥回収担当者が車両で収集し、衛生管理区域外に設置された専用冷蔵庫へ運搬し、外部業者が週3回収するまで保管すること。
- ⑫ 飼養管理者によると、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを実施しており、オールアウト後に洗浄・消毒を行い、その後の空舎期間は21日程度設けていたとのこと。過去21日間では発生鶏舎と異なるグループの3鶏舎へ2農場からの導入（直近では12月12、13日）と、1鶏舎からの出荷（直近では12月1日）を行っていた。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、農場周辺では、5年くらい前までは水鳥が見られたが最近は見ず、また大きな野生動物を見ることはないが、タヌキの目撃例はあるとのこと。農場敷地内では野生動物を見ることはないが、数年に1回くらいネコは見るとのこと。調査時、農場周辺及び敷地内で水鳥や哺乳動物は確認されなかった。
- ② 発生鶏舎内ではネズミ等野生動物を見たことはないが、前室に殺鼠剤は置いているとのこと。調査時、発生鶏舎内にラットサインは見られなかった。
- ③ 堆肥舎入口に防鳥ネットが張られていたが、一部破れがあり、調査時は、堆肥舎内にスズメやセキレイなど小型の野鳥、周辺にはカラスが多数確認された。
- ④ 農場内の各所に野鳥対策用のスピーカーが設置されており、カラスの鳴き声が流れていた。

(以上)